川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

2022年度入学生より 救急救命士養成コース開始

（厚生労働省申請中）

川崎医療福祉大学（倉敷市松島）は2022年4月、医療技術学部健康体育学科へ新たに「救急救命士養成コース」を開設します。高齢化の進展などで救急車出動件数は年々増加しており、病院前救護で活躍する救急救命士に注目が高まっています。宮川健学部長、矢野博己学科長に本コース開設の目的や特長などを聞きました。

右 副学長 兼 医療技術学部長　宮川 健（みやかわ・たけし）
左 医療技術学部 健康体育学科長　矢野博己（やの・ひろみ）

医療福祉のパイオニアとして地域医療を守り、支える人材育成

―なぜ今、救急救命士養成コースを開設するのでしょうか。

宮川　病院前救護において、救急患者の救命率向上および後遺症軽減のために重要なのが初期対応です。これを担う救急救命士は、一部医療行為を行い、救急の最前線で「命を救う」ために最善を尽くします。

本学が属する川崎学園の川崎医科大学附属病院と同総合医療センターは、「24時間365日患者さんを受け入れる」という精神で、救急医療に力を入れてきました。特に附属病院は、岡山県内で初めて「救命救急センター」を開設し、また日本で初めてドクターヘリの正式運航を始めた施設です。現在、「高度救命救急センター」として、現職消防士が救急救命士資格取得時に実習を行う施設にもなっています。

一方、本学は1991年の開学以来、医療福祉のパイオニアとして医療福祉人の育成に尽力しています。健康体育学科の卒業生には、消防士の職に就いた後、救急救命士の資格を取得し、救急医療の最前線で活躍する方も多数います。

このような背景の中、救急医療に積極的に取り組んでいる二つの病院と連携が可能な川崎医療福祉大学では、確かな医療知識と技術を習得した救急救命士の養成が可能であると考えました。

医療福祉の知識と実践力を備えた救急救命士を目指す学生の育成

―川崎医療福祉大学で学ぶメリットを教えてください。

宮川　救急現場の最前線に立ち続けるため、医療従事者である救急救命士には、継続的な自己研鑽が欠かせません。この土台となる専門的知識と技術をしっかりと身につけるため、附属病院、総合医療センターをはじめ、岡山県内で救急患者の救急車搬入数が多い三次・二次救急の指定を受けている総合病院6施設での実習を予定しています。

また、本学は川崎医科大学、川崎医科大学附属病院に隣接する好立地で、医学生や病院勤務の医療職との学びの共有も可能な環境です。加えて本学は、「医療福祉」に特化した7学科を有し、他学科の学生と切磋琢磨して学習を進めることで、チーム医療の精神と他職種への理解を深めていくことが可能です。

川崎医科大学附属病院等での病院実習では最前線の救急医療現場が体感できる

救急救命士養成コース

健康体育学科が培ってきたカリキュラムに新たに救命救急医学領域を追加

健康体育学科における救急救命士養成コースの位置付け

―健康体育学科の救急救命士養成コースの特長を教えてください。

矢野　健康体育学科は、本学開学と同時に設置された学科です。これまで30年にわたり、「健康学」「体育学」「医学」のすべてを兼ね備えた健康指導のスペシャリストの育成に取り組んできました。

この度新たに開設する救急救命士養成コースでは、当学科の三つの「学」からなる「健康体育学」を基盤とし、これに救命救急医学を加えるものです。さらに、少人数での実践的な救急医療の現場実習を通じ、より一層専門性の高い確かな知識と技術と体力を備えた救急救命士を目指す学生の育成を行います。

教授陣には、指導救命士経験者、長年にわたり高度救命救急センターで多くの救急救命士の指導・教育に従事してきた経験のある医師、現役の高度救命救急センター医師等の救急医療の専門家を迎え、指導体制の充実を図っています。

病院における救急救命士の活躍の場の拡大を期待

―救急救命士の活躍の場を教えてください。

矢野　6万人を超える救急救命士の免許登録者のうち、約6割を占めているのが消防職員です。また全国救急救命士養成施設の卒後進路は消防機関が53％と最も多く、次いで病院が13％です。医療機関からは、特に救急外来等での救急救命処置以外の業務による活躍が報告されており、救急患者の受け入れ体制の向上に大きく貢献しています。厚生労働省の検討会では、現在病院前に限定されている救急救命士の救急処置を、救急外来でもできるようにすることが提案されています。今後、救急救命士法が改正されれば、救急外来を中心に病院での救急救命士の活躍の場が広がり、医師や看護師の負担軽減にもつながることが期待されています。本学では、消防機関等において病院前救護で活躍する他に、将来的に病院でもチーム医療に参加することができる技能を有する救急救命士の養成を目指します。

救急救命士を目指す学生に求められることは

健康体育学科 特任教授　萩野 隆光

岡山県で本格的に救急救命士の育成が始まった2000年頃から、私は救命救急センターで救急救命士を目指す救急隊員の臨床教育に従事してきました。

この経験を生かし、この度新設される救急救命士養成コースでは自らの経験を余すところなく伝え、将来を担う救急救命士を本学健康体育学科から育成していくことに尽力したいと思っています。

本養成コースで救急救命士を目指す学生には、次のことをしっかり学んでもらいたいと思います。

①救急現場で適切な患者の評価と初期対応（救急処置）ができる能力の習得、②受け入れ病院への的確な患者情報提供ができる知識とコミュニケーション能力の習得、③他の医療職と協力して円滑なチーム医療ができる能力の習得、④災害に対応できる知識と技術の習得。これらの実現のため、知識と技術の習得だけではなく、可能な限り多くの救急現場に必要な臨床経験を積んでもらえるように、指導・教育してまいります。

元 高度救命救急センター長から指導を受けられる

倉敷市消防局 玉島消防署
救急救命士 **犬飼 秀信**さん
健康体育学科 2005年卒

救急救命士として活躍する卒業生

私は2009年に倉敷市消防局の消防士として採用され、救急救命士の先輩方が傷病者を短時間で的確に観察、判断、処置をして病院を選定する姿に憧れ救急救命士を志し、2016年に資格を取得しました。

私たち救急隊は心肺停止などを含む急病、けがなどの一般負傷、交通事故などさまざまな現場に出動します。救急救命士は現場から病院到着までの間、応急手当や医師の指示のもと特定行為と呼ばれる救急救命処置を行います。例えば心肺停止の傷病者に対して、気道を確保するための気管挿管、静脈路確保、薬剤投与などです。玉島消防署管内の1日の救急車出動件数は平均11件で、私はそのうち4～5件出動しています。傷病者を搬送する際は容体を把握し、悪化させることなく適切な処置を施すこと、また傷病者やその家族に優しく接し、分かりやすい言葉で話すことを心掛けています。

大学で医学・健康学・体育学を4年間しっかり学んだとはいえ、救急救命士として活動する礎になっています。なかでも医学分野の科目は救急救命士になる過程において、とても役に立ちました。また学科を超えた仲間との交流でコミュニケーション能力が高まり、自分が成長できたと実感しています。

今後は救急法や救命講習を通じて、一般の方に心肺蘇生法の重要性を広めていきたいと思います。そして病院前救護のスペシャリストとして自己研鑽に励みます。